



「利用者からたくさん学ばせてもらいました」と松島さんは振り返る



認知症になった時のための準備も必要になると気づいた。タイトルはとも刺最近はいん院や入所の保証だけでなく、転職の際の保証人になることも求められるらしい。ペットの引き受け先がらみの相談もあるそう。その「りす」の代表を長く務めてきた松島

# 「最後の準備」のすべて

平成という時代になつて間もなく、東京・東鴨の寺に「もやいの墓」という合葬式共同墓ができた。地縁・血縁に頼らない、会員制の、今でいう「墓友」

でつくる新しい墓のたちだった。しばらくして、その会員が声を上げる。「で、親しい親族もいないひとり暮らしのワタシの遺骨を、どなたが、もやいの碑に入れてくれるの?」

い。それから納骨、税金納付、郵便物の返還、年金停止、家具処分、電気ガス代精算……

を国内で本格的に実施したのは「りす」が初めてである。例えば、亡くなった後、誰に、いつ知らせるか。Aさんには絶対、知らせないで。焼香は断ってほしいという依頼を受けたら、本当にAさんが告別式

にやってきて……なんていうケースもあったとか。いったい何があったのやら。

如戒さん(81)が本を出した。タイトルは「私、ひとりで死ねますか」。支える契約家族。四半世紀にわたり会員たちの要望を実現してきた事例集であり、これから人生の最終段階をひとりで過ごすための準備対策本にもなっている。松島さんは「

ひとりで死ねるわけない」。松島さんは、言う。「でもそれは、ひとりで人生の最後をどう生き抜くか、考えるということなんで

## 生前契約の25年

所・入院保証、手術の立ち会い、買い物や外出の付き添い。その「りす」の精神。【滝野隆浩・58歳】 次回は31日掲載